

◇小石原昭先生について

先生が揮毫されている。先生はいまでも原稿は絶対に人任せにせず、ご自分の手で原稿用紙を埋められている。折々に月刊『文藝春秋』に載る先生の珠玉のエッセーには、ときに微笑み、ときに泣き、敬服するほかに、私の東大の同級生に康芳夫という、伝説のプロデューサーがいる。

先生はご自身のプロフィールで、情報企業家・ジャーナリストと名乗られているように、その長く重厚なキャリアの出发点は、河出書房の編集者であった。「河出新書」を企画して成功させた、二七歳で若者向けの総合雑誌「知性」を創刊してヒットを飛ばし、編集長として辣腕をふるわれたのである。また、先生は編集者時代からのおつきあいだった井伏鱒二先生とも親交を深められたことから、先生の会社の社名「要慎」は、井伏

先生が揮毫されている。先生はいまでも原稿は絶対に人任せにせず、ご自分の手で原稿用紙を埋められている。折々に月刊『文藝春秋』に載る先生の珠玉のエッセーには、ときに微笑み、ときに泣き、敬服するほかに、私の東大の同級生に康芳夫という、伝説のプロデューサーがいる。

ら翌年三月末にかけて催される「ふくの会」(現在は「山田屋」で開催)には、希望者が四〇〇人以上もいるところを毎年一五〇人に限定されているという。光栄にも私は、このところ毎回お声掛けいただいている。

◇旧制広島高等師範学校OBとしての小石原先生への取材
小石原先生が旧制広島高等師範学校を卒業されていることから、当時の講演会には出席せず、同じ日におこなわれる文藝春秋のパーティへの出席を決め込んでいる。私もそのそれよりもはるかに魅力的な集まりなのだろう。そこでも小石原先生は、常連として登場されている。

各方面にお顔の広い先生だけに、先生が主宰する会食会となると、出席希望者は大変な人数になる。先生が五二年間にわたる毎年十二月はじめての

一月十六日午前十一時三〇分にお邪魔して、途中でお食事も一緒にしながら(先生が竹葉亭本店からわざわざ取り寄せてくださった美味しいうなぎを馳走になった)約二時間半にわたり先生のお話をうかがった。



高井氏

師範大学(学校)設置を求める声に思う

高井・岡芹法律事務所弁護士 高井伸夫

(3)

プロローグ
旧制の高等師範学校・師範学校の状況に不案内な私のために、先生はご初歩の知識から、順々にご教授くださった。概要のこと。

①高等師範学校と師範学校はまったく別のもの。師範学校は旧制の小学校・中学校の教師(小)学校教師は「訓導」、中学校教師は「教諭」という呼称を養成したのに対して、高等師範学校はそれより上の学校の教師・研究者を養成していたこと。

②師範学校は全国の都道府県に各三校くらいあったが、高等師範学校は、日本全国で、東京高等師範学校、広島高等師範学校、東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校の四校しかなかったこと。

③昭和十八年九月一日に制度が変更されて、すべての文系の学生の徴兵免除が取り消され、理工系のみ三〇倍に跳ね上がったこと。当時の人々も、軍国少年はいるにいたが、本音では戦争に行くのは皆いやだったというのが実態であったこと。

④広島高等師範学校は爆心地のすぐ近くであったため、校舎は跡形もなくなっていたが、上野の美術学校(現在の東京芸術大学)に進もうと決めたため、一人っ子であったため、ご両親からあつたため、ご両親から説得で、徴兵が免除されたこと。

⑤戦後、先生は在学中から、広島に本社のある「中国新聞」で記事を書き、その後、旧制女子専門学校(当時は日本女子大も東京女子大も女子専門学校の令のもとにあった)で講義を持たれていたこと。

⑥学外での活躍が目立っていたために、卒業させるかどうか職員会議で検討されたが、彼のような人材こそ卒業させるべしと主張してくれた眞下三郎教授のお蔭で、無事卒業となったこと等々、実体験ならではのズシリとした迫力であった。

私が特に関心をもったのは、(1)最近の文部科学大臣はタヌキだが、明治の頃の文部大臣は、初代が森有禮であったことからわかるように、教育の重要性に鑑みて、副総理格の実力者が文部大臣に就いていた。それゆえ強いリーダーシップを発揮して教育問題に取り組みたいのだが、先生は頑として受けつけてくださらない。小石原先生と広島高等師範学校の話、引き続き次回も書き、更には、小石原先生のご紹介により二〇一三年十二月十日にご面談の機会を得た外山滋比古先生(東京高等師範学校出身・お茶の水女子大学名誉教授・文学博士)のご著書から引用等も含めて、ご紹介したい。